
裏世界の死神少女

鷗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏世界の死神少女

【Nコード】

N8248D

【作者名】

鶯

【あらすじ】

死神だった少女は今、普通の高校生と変わらない平穏な日常を送っていたはずだった。”裏世界”になど、もう行かない。そう誓っていた。だが…ひとりの少年と出会った事で少女は再び”裏世界”に吞まれていく。…そんな…哀れな死神の物語… 休載中

プロローグ（前書き）

初めての方も、他の物語を読んでくださってる方も、こんにちは！
！小枝 莉乃です（*^|^*）

この物語をお目にかけいただき、ありがとうございますm（
―）

『お家の国のアリス』と並行させていただいてるので投稿の目安は
約一週間程を目標とさせていただきます。

文面等、つたない面がございますが、これからも死神少女をよろし
くお願いします^^

では、はじまりはじまり～

ブローグ

僕らがお前を手放すと思う？

もう

…お前がいないとダメなんだ

お前がいないと…

再び闇が壊れてしまう

この世界の神

罪人に死を

お前が必要なんだ

……死神……

戻ってこい

だから……

お前は…逃げられないんだ

この世界から

この運命から

さあ、僕らのために
：

殺戮の…死神…

第1夜 日常

月も隠れた闇の世界

己の欲望を満たすため

闇夜で蠢く影ひとつ

+

「…なんとしてでも連れて来い。」

「はい」

「俺には…あの力が必要なんだ……失敗は許されないぞ……」

「…はい」

+

放課後の校舎にバタバタと騒がしい足音が響く

「由子！！早く！！図書館の席なくなっちゃう！！」

前を走るは、おてんば姫こと天羽 結衣

「結衣は体力バカねえーそんなんじゃまた小林先生に怒られちゃうよ？」

この微笑みながら歩いているほうが金沢 由子

「大丈夫だって！！ほらっもうすぐだよ！！」

「あら？結衣、前…」

「へっ？」

ドンッ！！

「うわああ？！」

「…っ！！」

ドサッ！！

ちょうど廊下と階段の角の部分。出てきた人物と結衣がぶつかり倒れた

「…あら」もちろん結衣が押し倒したように

「っ…あいたたた…あつごつごめんなさい!!」

そんな状態に気付き慌てて離れた結衣

「あ…大丈夫」

「こあらつ天羽!!あ・れ・ほ・ど・廊下は走るなど言っちよるに!!お前はいつも…っ!!」

「すつすみませんっ…」

「小林先生…まあ落着いて下さい」

「金沢あ…お前も学級委員なんやから注意してくれや…」

「だって言っただって聞きませんもの」

「もう二年にもなるのにどうにできんかのぉ…」

眉間にシワを寄せ、どうしたもんかと考える素振りを見せる

「無理ですね。」

「バツサリやな…」

「それより小林先生？」

「ん？なんだ？」

「彼は転校生ですか？」

結衣が倒した人物を指差す。今はもう起き上がり、ついた埃を落としている

「？」

指を指しているこちらに気付き微笑んだ

「ん？ああそうだ。今校内案内の途中でな。全く…天羽に邪魔されちまったわい。営業妨害や」

「いや！！あ、あたしのせい？！しかも、なんか使い方違うしっ！！」

「細けえこたあ気にするな。お前ら図書館行くつもりやったんやろ？」

「あ、はい」

「今日は大目に見てやるさかい、はよ行け」

シッシツと手を動かすこばやん

「動物扱い！！」

「それを言うなら邪魔者扱い…」

「邪魔ってこばやん…!!」

「邪魔や」

「ひどっ!!」

耳に指を当てて聞こえない素振りをするこばやん

「…それじゃあ先生、私たち行きますね」

「おう、気いつけて行きや。その猛獣に」

「なにおう?!」

「うふふ…気をつけます」

半ば由子に引きずられながら図書館へと消えて行く

「…面白い人達ですね」

「ああ、見てるとな。相手にすると疲れるだけなんやが…まあ学生のうちはあるくらい元気があったほうがええ。お前さんもや」

「んじゃ案内に戻るか」

「あ、はい」

歩き始めるふたり

「それにしても…高校になって転校とは珍しいなあ」

「え…あ…」

「まあいろいろ事情があるんやろおな。無理せず頑張りんしゃい」

「はい。ありがとうございます」

「あ、ここが…」

+

「あれ！！律？」

図書館に入ると真っ先に目に飛び込んで来た人物がいた。

同じクラスで由子の幼馴染み…高梨 律！！

「…んあ？」

「もおー！！行くなら言ってくれたっていいじゃん！！」

「は？知らんがな。なんで言わなあかんねん」

「「冷たいなー」」

そう言いつつ荷物をどかして向かいの席に座る

「…なんでここ座んねん。別の場所行けや」

「えー空いてんだからいいじゃーん」

「他に席もないしねえ…私たちに帰れって言うの？」

「…はあ…うるさくすんなよ…」

確かに席は満席。律は諦めたようにため息をつき、やっていたのであろうノートのまとめを再開

「えーなにー？勉強？」

「ん。家じゃやらんし、バイトもあるけん」

「テスト期間中にバイトかぁー…余裕しゃくしゃくイエイ？」

「…は？」

「終わったら見せてね」

「……自分でやれや」

「冗談よ。自分でまとめたほうが分かりやすいってゆうの」

「…っ」

「あ、あたしレポートやらなきゃ！！資料探してくるね」
そう言い席を立て去って行く結衣

「…ふふ…律も可愛いわねえ」

「……………は？」

くすつと由子が笑う

「ああ言いながら…結衣のためでしょ？この席取ったの。あの子のお気に入り席だしねえ」

「なっ…！！」

みるみる顔が赤くなっていく律

「ふふっ健気ね。まああの子の一番は私だから？」

「おまつ…」

「ただいまあゝ？どうかしたの？」

両手で五冊程抱えて帰ってきた

「おかえりなさい。なんでもないわよ」

そう言った由子に対し、律はうつむき手で顔を覆い隠している

「…そう？」

まあいいかと思ったようで、席に座り資料を読み始める

「私も勉強しないとなあ」

由子が呟き、今日配られた数学のテスト範囲の冊子を解き始めた

十

五時になりました。用の無い生徒は…

「ん？…もう五時か」

顔を上げた律がふと前を見ると

「……ぐう」

とつくに冊子を終えた由子が寝ていて

……パラ……パラ……

レポートをやるはずの結衣が資料を読みふけている

「……由子……起きろ……！」

「ん……」

「結衣……！借りないなら返してこい……！」

「……………」

「おいっ……！」

「「んあ……？」」

ふたりして間抜けな声だ

「五時だ……！片付けろ……！」

吹き出しそうになるのを堪えながら言う

「……え？もう五時……？」

「そつや。五分やるから片付けてこい。」

「えっ!!ちよっ!!ちよーっ!!」

バタバタと走り去る結衣。『館内は走らないように!!』と聞こえたのは気のせいではないだろう。

……俺は保護者か…

+

図書館を出た帰り道

「いやー、本読んじやうと止まなくてさ」

「あれ資料やろ…?」

「結衣にとっては資料も本も対して変わらないわよね」

「えへへー」

苦笑気味に笑う結衣

「でもそんなじゃレポート書けへんやん」

「あ、それなら大丈夫ー頭に内容覚えてるからー」

「…まじで？」

「そうよねー結衣の記憶力にはびっくりしちゃったわ。得意レベルじゃないんだもの。あれは一種の才能ね」

「そうなんや…」

「…あら？もしかして知らなかったのかしら？ごめんなさいねー悪いことしちゃったかしら？」

「…なんのことや」

こいつ絶対わざとや…と思いつつシラをきる。こいつは俺の反応をみて楽しんどるんや…

「いいえ？なんでもないわ」

そんな様子を笑う由子

「なに？…どうしたの二人共？」

「…ワレには関係あらへんわ」

「…なつなによー！その言いかたあー！」

ムツとした顔になる結衣

「確かにその言い方はないわね…」

呆れた由子

「う”っ…」

うろたえる律

「もうちょつと言い方考えなよね！！あたしは図太い神経してるからいいけどさっ…！」

「そうねえ…好きな子に嫌われちゃうわよ？」

「なっ…？！」

「えー！！律好きな子いるの？！」

「はあ？！…！」

焦りながら由子を一睨みする律

「結衣、たとえば話よ」

ニコツと笑って言う由子

律は内心ヒヤヒヤだ

「そ…そかあ…あ…！好きな子出来たら真っ先に教えてね…！出来るだけ協力するから…！」

「はあ？…遠慮しとくわ…」

「なんでよーっ？！」

「だってなんかへましそうやし」

「う”っ…」

「あら？あるの？」

「ん…微妙に心当たりなら…」

「あら、じゃあやめたほうがいいわね。邪魔ならしていいと思うけど」

「邪魔ってオイ…」

「うふふ。冗談よ冗談」

「はあ…」

「ん…でもさ」

「」「？」

「出会いがないよね」

「んゝまあ確かにそうね」

「一年も経てばほぼ全員顔見知りやしな」

「転校生とか高校じゃあんまり来ない…って、あ、そうそう」

「ん？どないしたん？」

「今日転校生見たんだよ…！！ねっ…！！」

「へえ？」

「男子でね、金髪の蒼目で…律と同じくらいの高さかなあ？」

「確かにそれくらいだった気がするわ」

「ふゝん？」

「そうそう、しかも結衣ったらぶつかって押し倒しちゃっし…」

「はあ?!」

「あっあれは事故だもんっ」

焦りながら訂正する結衣

「あの後こばやんにも怒られるし…ほんとツイてない…」

しょげている結衣

「あら？気分損ねちゃったかしら？」

「…別に」

あからさまにムスツとしている律

「それにしても…」

空を見上げながら独り言のようにポソツと呟く

「なんかどっかで見たことあるような気がするんだよね…」

「そりゃあ金髪蒼目のやつらなんかもはやどこにでもおるやん。気のせいとちゃうん？」

「…そっかなあ…？」

「知らん」

「なんか律ヒドい…」

「そうねえ…少なくとも私は知らないわ」

「ほえ…そっかあ…やっぱり気のせいかなあ？」

「考えても出てこんのやら気のせいやろな」

「そうねえ結衣が思い出せないなんて珍しいけど…」

「あ！！そだよね！！一回会って話した人なら覚えてるはずだもん！！やっぱ気のせいだ〜」

「解決してよかったわね」

「うん！！」

笑いあうふたり

分かれ道

「んじゃまた明日な〜」

「ええ気をつけてね」

「由子も！！じゃね〜」

それぞれ帰りの道を進む

…空に雲がかかる

まるで、光を遮るかのように…

第1夜 日常（後書き）

感想など頂けたらと思います（*^|^*）

こばちゃんと律はいろいろな方言が入り交じっちゃってると思い下さい。〇（<>:）〇ふがないながらも頑張っていきたいと思ひます！！

第2夜 不穩

雲に覆われた太陽がカーテン越しに鈍く光る

その光は、いかにも誰かが寝ているであろうベットを静かに照らしている

ごそごそと寝返りをうつらしき音が聞こえる。

…と、そこに一頭の…犬よりも大きい…犬に似て非なる生き物が入ってくる

ウォン!!

《バフツ》

「ぎゃぶ?!」

白い二本の足がベットのふくらみに落ちると…同時に寝ているらしき人物の潰れた声が聞こえた

ウォン!!

「…ゆ…ユキ…?…後五分…むにゃむにゃ…」

クウン…

ユキと呼ばれたソレは再び眠りにつきそうな飼い主に対し悲しそう

な声を上げる…と同時に

《ドスッ》

「っ…ぐえっ…」

ベットのの上に乗った

「お…重…い…」

ウォーンー！

無邪気そうな声で吠えながらしっぽをブンブン振っている

「…くっ…」

ガバツと布団を持ち上げ起きる結衣
ユキはヒラリと床へ下り立っている

「う”ー…」

寝ぼけつつ、寝癖で爆発した頭をぽりぽりかきながら時計を見る

「…ん？」

… 八時

「ん！？」

… 八時一分

「八時い?!」

布団をはねのけて慌てて着替え始めた

「うわーんっ遅刻ギリギリじゃんっ」

三分で着替えを終わらせた結衣が階下へ降りようとすると、階段の下にはいつの間にか移動していたユキがしっぽを振りながらエサ入れをくわえて待っていた

「はいはい、今用意するからちよつとどいてね」

そんなことを言いながらパタパタとキッチンへ入って行く

「あれ？クロ！なんでこんなところに？！」

キッチンへ入るとテーブルの下にいたもう一頭に向かって声を掛ける。名前からわかるように黒い。

ユキから受け取った器にエサをいれ、置いてあるクロのほうにも入れておく。

「水も用意したし…」

洗面台に駆け込み五分で出て来る

「じゃあ留守番よろしくね!!行つてきまあす!!」

バンツと音を立てて閉まるドア

【……毎朝慌ただしいな……】

【そうですねえ〜】

【もう一眠りするかな……】

【あ、じゃあクロの分の朝ご飯いただきますね】

【それはあかん!!】

【…ふふ】

+

ガラガラガラガラッ

「はあ……はあ……」

「あれ?結衣じゃん!!おはよー!」

「ん〜?おはよー」

クラスの子と一言二言交わし、席へと向かう

「よかったわね、間に合って」

由子が笑顔で話し掛ける

「うんー。ユキが起こしてくれたんだあ！」

「ユキって…あの白いわんちゃん？」

「あ、うん！そうそうー！」

「よかったわね」

ふふつと笑った

そんな中、女子たちの会話が耳に入ってくる

「そういえば今日さ、うちのクラスに転校生くるんだってー！」

「えー！！マジ？！男？女？」

「男！男！金パツだつてー！！理沙の好みだったりしてー！！」

「えっ！！ちょっとマジ惚れたらどーしよー！！」

あははは！！とゆう笑い声は学校中に響き渡る勢いだ

「…転校生って昨日の…？」

「たぶん、そうね。うちのクラスに来るらしいわ」

「ほへー」

「座るとしたら結衣の後ろでしょうね、空いてるし…いいわね…窓際の一番後ろ…」

「あはは…って…あれ？律は？」

由子の後ろの席を見て尋ねる

「さあ？まだ来てないわよ～遅刻でしょ」

ガラガラッ

ドアを見ると小林が入ってきた

「お前ら席つけー。今から転校生を紹介するさかい。終わるまで黙っとけや～質問は最後な～。んじゃ入れ」

全員が席についたのを確認すると転校生らしき人物に声を掛ける

ガラガラガラッ

「…おっ！ー！セーフ！？」

息を切らせながら入ってきたのは…

律

一同沈黙という名の冷たい視線を向ける

.....っ

「ぎやははは!! 律かよ!!」

「ちよつとー冗談やめてよね」

クラスから沸き起こる笑いの波

「高梨い…望み通り遅刻にしてやる」

「は?! なんでやん!?!」

「五秒で席つかへんかったら欠席な」

「わーっちよっちよっ」

ガタガタと音を出しながら席につく

「うし、とりあえず全員やな…海里!! 入ってこい」

「あ…はい」

開け放たれたドアから入ってくるのは金髪、蒼目の昨日結衣と由子がみた人物

「海里かいり 流架るかです。よろしく」

「はい、拍手」

よろしくの言葉と共に拍手がパチパチと起こる

「海里の席は…」

ふと結衣の後ろをみる

「あゝ…今空いてるとこないけん、下から持ってくるさかいとりあえず地べた座つとけや」

「…え？」

予想外の展開だったのだろう…目が丸くなる流架

「ちよつ…！こばやん…！あたしの後ろの席空いてるんだけど？！イジメ？！これイジメかなあ？！」

机から身を乗り出す結衣

「ああ、悪い。天羽のせいで見えなかったわ。もうちょい痩せえ。」
小林は悪びれもなく言い放った

「ヒドっ…！」

「んじゃ、海里はあのうるさいのの後ろな」

「は、はい」

返事をして席へと移動する

「あ、そうだ、学級委員、立て」

「…はい？」

「あ？」

由子と律が立つ

「あー…高梨もだったか」

「んなー?!」

「だせー!!忘れられてるよ!!だってお前柄じゃねえしなあ!!」

「っ…るせー!!くそお…」

「「あははははは!!」」

また笑いが巻き起こる

「…少し黙れや。」

…小林の一声で教室が一瞬で静まる

「んじゃ、学級委員、どっちでもええから慣れるまで面倒みてやり
いや。ああ校内案内はしたからな。んじゃ終わりの授業行け」

そう言い残し担任は出ていった

「くそぉ〜こばやんめっ」

いなくなつた直後由子のほうに体を向け、誰に言うわけでもなく結衣が呟いた

「小林先生は結衣で遊ぶのが趣味だからねえ…声の調子が高くても無表情だけど…」

「むう…こんど仕返ししてやるう…」

「ふふ…頑張つてね。」

微笑む由子

「あ、そうそう…」

由子が流架に向き直る

「海里くん…?」

「え? あ…はい」

「学級委員の金沢 由子です。よろしくね」

「あ、あたしは天羽 結衣だよ〜覚えてね〜」

「あ、はい。よろし…」

「俺は高梨 律だ。よろしく」

隣りから口を挟む律

「よろしくね。高梨くんはもう覚えたよ」

にこつと微笑み話す流架

「…まじ？」

「うん」

「だってあれじゃねー誰でも覚えちゃうよー!!」

「そうね…インパクトありすぎたわね」

「お前も人のこと言えないだろーが!!昨日と今日で!!」

「あはっ…あははは!!」

引きつった笑いを見せる結衣

「あ、そくだ!!それより消しゴム貸せ!!お前2個持ってたやろ!!」

「え?うん…はい!!」

筆箱を開けてすぐに手渡す結衣

「サンキューッ」

「海里くん…教科書はあるの？」

「あ、いえ」

「そつ…じゃあ律に見せてもらうつといいわ」

そうこうしているうちに先生が入ってきた

+

キンコーンカーンコーン

「…っお昼〜!」
伸びをしながら結衣が叫ぶ

「ふふ。そんなにお腹空いたの？」

「昼にしようぜ〜どこで食べる？」

「そうね…海里くんもいるし…」
流架のほうをみると

「うわっ…」

ひと、人、ヒトで周りを囲まれている

「ん〜…遅かったかあ〜」

「そうねえ…とりあえず避難しましょうか…」

そう言い、ドアへと向かう由子

「……………うん……」

大丈夫かなあ…と振り返りつつも由子についてゆく結衣

「由子！！俺らこばやんに頼まれてるやろが！！」

「じゃあ頑張つて連れてきなさいな。私にはあそこに割りいる勇氣はないわ」

「う”っ……」

「あつ！！あの！！高梨くん！！」

「…へ？あ？うん？」

ドアの前で話していたところ、
声を掛けられまぬけな声をあげてしまう
見ると流架が立ち上がったてこっちを見ている

「あのっ一緒に昼食べてもいいかなあ…？」

不安げに尋ねてくる流架

「ん？いいぜ！こっちこいよ！！」

パツと顔を輝かせ周りの子たちに、ごめんね！！と謝り、走ってきた
困んでいた団体から、えゝ、とか、なんでゝという不満の音が聞こ

える

「じゃあ行きましょうか」

「うん!!」由子が教室から出て行く後をついていく

「てか、海里、よくあんな中こつち来れたなあ」

「あはは、結構勇気必要だったんだけどね。僕ああゆづの苦手なんだ」

「へ〜?」

「あ、でも高梨くんたちに声掛けるのも勇気必要だったんだけどね」
流架が少し笑いながら話す。この四時間の間で律とは打ち解けたようだ

「確かに最初だとね〜勇気いるよね〜」

「でも、私たちはあなたのこと任されてるし気兼ねなく話し掛けていいわよ」

微笑みながら話す由子

「あ、そだ海里くん?」

「はい?」

「お昼は持つてる？」

流架の持つてきている鞆を見て尋ねる結衣

「朝、コンビニで買ってきたからありますよ」

「じゃあ屋上で平気だね」

階段を上り、屋上についた。

階段の上の屋根に座りお弁当を広げる

「…ずいぶん大きい袋だけど…なに買ってきたの…？」

流架の出した袋を見て結衣が尋ねた

「えっと…メロンパンとクロッケパンと焼きそばパンと親子丼と鮭イクラ鉄火丼とナポリタンスパゲティです」

「…おお…！よく食べるね、律並み…！」

「いや、俺でもここまで食べねえぞ…？」

「え？！やつぱり多いですか？」

「そうね、お相撲さん並みかしら？」

「あはははは…！」

笑う結衣と微笑む由子。律と流架も笑う

「ああ、俺それより気になったことあんだよ」

「どうかしたの？」

「海里、お前の呼びかたや」

「え？」

「俺、丁寧語嫌いなんよ。だから丁寧語禁止な。ついでに名前で呼び」

「律、まだ来たばかりじゃん」

「俺がいやなんじゃー！ー！なんかむずむずすんねん！ー！」

「え、でも…高梨くつ」
「律」

「あつ…」
「律」

「りつ…律…くん…」

「”くん”はよけいじゃー！ー！」
ちやぶ台返しのしぐさを見せる律

「あはははは！ー！おもしろーい！ー！」
ふたりを見て爆笑する結衣

「いきなりは無理があるわよ律。くん付けでもいいじゃない」

「ん」

「あ、でも僕…頑張ります!!」

「あ、そう?じゃああたしのことは結衣って呼んでね」

「えっ」

「ああ、私は別になんだって構わないわ」

「だめっ!!由子は由子なの!!」

「あら…」

「決まりね!!海里くん」

「あーほっ」

「うぬ?!」

「それじゃ意味ないやんけ!!俺らも流架って呼ばな」

「あ!!そか!!よろしくね流架!!」

「あ、はい!!」

「はいじゃなくて、うん」

「あ、うん!!」

はにかみながら笑う流架

「それじゃあそろそろ戻りましょうか」

みんなが食べ終わったのを確認して立ち上がる由子

「そだね」

それぞれ荷物をもち立ち上がり、教室へと帰っていく

十

教室へ戻った四人に待っていたのは異質な沈黙だった

「いつもあそこで食べてるの？」

「うん、みんながお昼あればね、無かったら学食行くけど」

「学食の『親子丼スペシャル!!なにが出るかは楽しみ!!』」

ゆうメニユーあつてな、600円するんやけどマジうまいでー!!」
んど食べてみー!!いや、明日にでも行くかー!!」

「それさー!!転校祝いにしない?!ふたりで300円ずつ出してさ
ー!!」

「……え?」

「おっ!!それええな!!」

「あ…あの…」

ふたりで盛り上がってしまったって流架の声は届いていないようだ

「ああなったらもう止められないわよ」

「え…」

「結衣と話してるとねえなんか世界が出来ちゃうらしくて…周りの
音が入って来なくなっちゃうのよ…律にも言われるわ。一種の才能
かしらね」

ふふつと笑う

「才能…ですか…」

結衣を見る流架の目の色が変わる。だが誰もそれに気付きはしない。

「あ、そうだ由子さん」

「ふふ…なんか違和感あるわねえ…なにかしら？」

「えっ…あっ…これからも一緒にお昼食べてもいいでしょうか…」

「あら、そんなこと聞かなくていいわよ。ふたりのはしゃぎっぷりを見なさい。移動まで一緒よ」

笑いながら話す

「よかった…」

「あ、でも別にしやすいところが出来たらそっちに行っても構わないからね？」

「あ、はい！…ありがとうございます！…」

「あと、丁寧語も直さなきゃね」

「あ…うつ…うん…！」

ガラガラガラッ

ドアを開け、中へ入る結衣と律。ふたりはまだしゃべり足りないらしく、入っても二、三步しゃべっていたが、教室の一瞬で変わった空気に気付かないわけがなかった

「…？」

静かな…張り詰めた静寂…物音さえしない

「…なんや？なんかあったん？」

近くにいた男子のほうを見ても視線を逸らされる

また、辺りが静まり返る。

その静寂を破ったのは先程、流架を取り囲んでいたグループのリーダー的存在…有菜だった

「流架くん！！なんでそんな奴らと一緒にいるのぉ？」流架以外の三人を睨みつける有菜

「こつちでみんなと話そぉ？」

そう言い、手を引っ張っていくギャルっぽい子がひとり

「え…あの…」

クラスの中でギャルっぽい子たちの声が響きはじめる
少しぎこちなさは残るものの、空気は本来の教室のものへと戻っていった

「…なんなんやねん…」

呆然と立ち尽くしている結衣を隣りに毒づく律

「女って怖いわね。とりあえず席に戻りましょ」

歩きだす由子

「結衣？大丈夫か？」

座つてもボーっとしている結衣を見て声を掛ける

「…え？あっ！うん！！びっくりしただけ！！！」

あはっと笑う

「それにしても…まだいたのね、ああゆう人たち…」

ちらっと見ながら気付かれないように呟く

「そやなあ…わいも小学、中学までかと思つとつたで…高校まできて幼いなあ…」

「俺もびびったわあ…ってこばやんっ？！」

いつのまにか…律の隣り下でヤンキー座りをしている小林がいた

「あら、小林先生…」

「こばやんじゃ〜ん」

「気配なかったで今！！お前らなんで驚かんねん？！」

「せや、普通もつとビビるで？」

「え…だって入ってくるとこ見えたし」

と結衣

「すみません…あまり感情が出ないもので…」

微笑む由子

「あー…皮肉に取らんでくれな？ちゃうから」

「とりあえず…流架…どうにかせえへんとなあ…」

「苦手って言うてたもんね…」

「まあ、本当に嫌になつたらなんとかするでしょう」

「せやけど…ありゃあ流される性格っぽくないかあ？」

「確かになあ…」

「様子見…ね…」

「う”ー…」

「彼が私たちに助けを求めたら連れ出しましょ」

「…うん」

「せやな」

「うし、じゃあ授業はじめるで席つけ」

周りから…てか、中心から、え〜とかゆ〜う声があがる
流架が戻ってきた

「大丈夫だった？」

小声で話し掛ける結衣

「うん、なんとかね。メアドとケー番、教える事になっちゃった」
苦笑いする流架

「そかぁ…いつでも頼っていいんだからね？」

「せや、頼れな」

「うん、ありがとう」

少し話しをした後結衣は前を向く。だって、さっきの女の子が数人、
こっちを見ていたから…

+

HRも終わり、皆が帰宅する中、結衣は小林に呼び出され、資料室
に来ていた

「ふたりは委員会だし…流架は連れ去られちゃうし…家で勉強でも
するかなあ〜」

独り言を呟いていると、小林が入ってきた

「悪いいな、待たせて」

「んや、平気だよ」

「どや？最近の調子はどう見ての通りか」

「うん。心配ご無用」

「そりゃ心強い限りで…せや、あの狼どもは元気なんか？」

煙草に火をつけながら尋ねる小林

「うん、元気元気」

「ふむ…久々に会いてえな…うし、今夜行くわ」

「いきなりっすね」

ニヤツとしながら言葉を返す

「何時に来る？」

「せやな…十時から一時の間に行くわ。起きてるやろ？」

「うわ、教師の言葉とは思えない」

笑いながら言う

「まあ副職やし、ええやろ」

「んじゃ待ってるね〜」

部屋を出て行こうとする結衣

「あ、せや…」

「ん？」

「……いや、やっぱり後にするわ」

「そう？」

じゃあね〜と言いつつ外へ出て行く結衣

足音が聞こえなくなるのを確認したあと、棚から一冊のファイルを取り、開く

そこには、由子の写真と細かな字でびっしりと何事かが記されていた

夕闇の中、窓を叩く一陣の風…

…枝が揺れ花が散る…

…夢く…

…あらがう術もなく…

咲かせても

咲かせても

…
崩れ去る

第2夜 不穩（後書き）

えゝ…お読みいただきありがとうございます（＾・・＾）

第2夜を書いている途中で文が少しおかしいところがあり、直そう
と思ったのですが…どこに隠れてしまったのか探しても探しても見
つからないのです（＾・・＾；）

見つけ次第、お知らせ頂けたら…と思います…

私も探します！！もちろん！！

でわ、恐縮ですがよろしくお願い致します

m（――）m

第3夜 予兆

風が枝を揺らし

ザワザワと音をたてる

「なぐんか嫌な風やな…」

ふうつとため息をつき煙草を持つ手を下ろす

とある家の玄関前に鞆を置き、持っていた携帯灰皿で煙草の火を消す

ふと…視線を感じ、その家の庭先を見る…と、いつからいたのかこ
つちをジッと睨んでいる黒い生き物がいた

「おー…クロ。久しぶりやな…出迎えか？」

話しかけるがソレからの返事はない

ただ静かに…しかし、いつでも襲いかかれるように…ただ、じつと…
…見ているだけだ

数秒間、睨み合いをしていると、上の方から物音がした

「あれー？こばやん？」

声に振り返ってみると屋根にいた白い狼と目が合った

声の主は…いない

ユキと見つめあっていると横で人の気配がする

「…いつまで突っ立ってんの？風強いし早く中入ろ」

そう言い彼女は立て掛けてあつた鞆を持ちドアを開ける

「ああ…悪いな結衣」

全員が入るのを確認した後、結衣がボタンとドアを閉めた

二頭の狼に前後を挟まれ部屋に入る

「座れば？」

後ろから結衣の声がしたがソファに鞆を置いてどこかに行ってしまったらしい。

「はい、コーヒーでよかった？」

上着を置いて座ると、しばらくして結衣が姿を見せた
両手にはカップを持っている

「んあ、サンキュ」

受け取り、飲もうと口に近付けると…なにやら足下がくすぐったい
見るとユキが鼻をスンスン鳴らし臭いを嗅いでいる

「なんやユキ」

呼び掛けるとユキはこちらを見上げしっぽをパタと一振りし、向かいの結衣の隣りへ行き、伏せた

「こばやん来たの久し振りだからね。警戒されたんじゃない？」

「警戒されてるのはいつものことやけどな。あの黒いのは」

「クロは仕方ないよ」

あはは」と笑いながら話す

「そついや姿が見えんけど？」

「どっかにいるんじゃない？」

「…そか」

「……で、なんの用事で来たの？」

早く話せと空気が語っている

「んあ？ああ……」

顎に手を当てなにか考えているようだ

…数分間の沈黙のあと、口を開く

「…いくつかあるんやけど…全部が全部お前さんの友達の話や」

「…うん？」

表情から察するにいい話しではないようだ

「んじゃ…軽いことから…」

「うん」

「…高梨は…ほら、お前がこつち側に来たときに言ったやろ？十中八九…間違いなく関西のスパイやって。」

「けど…目的を見失ってるか、記憶喪失か…でしょ？」

「ああ、調べてもそれらしき動きはない。こつち側になるにしても、わいになにかしら連絡がないのはおかしい。やからこれはただの確認や。現状は変わらず保留な」

「うん。」

「まあ…見てる限り害はないが、注意するにこしたこたない」

「んで、あの転校生のことやけど…」

「流架？」

「そや。調査結果はでとらんが…俺の勘が正しければ…黒やな」

「マジで？…確かに見たことあるとは思ったけど…」

またか。という表情でソファに深く沈む

転校生が結衣を狙ってきたことはこれが初めてではない

「ふむ…まあ…お前は死神やったからな、それは仕方あらへん。とりあえず、結果出るまでこれも注意」

「…わかった」

「…んでなあ…金沢のことなんやけど…」

「…うん…？」

言いにくそうに小林が額に手を当てうつむく

「白いことは間違いないんやが……向こう側……裏が一枚噛んでき
とるみたいなんや」

「……は？」

結衣の眉間にシワがよる

「…由子が？」

「そや。正確には金沢の親父さんの働いてる会社なんやけど」

「…なんでそれに由子が関係するの？」

ピリピリとした空気が発せられる

「…まあ聞け。…その会社がやってるのがヤクの密売なんよ。だいたい、小規模の会社は関係者辺りで順番に回すはずなんや…そこだつて例外ではなかったんやけど、今回…なぜか知らんが金沢の親父さんに手渡されたゆう情報が入ってきてん」

「なんで…」

「理由はまだわかつたらん。誰かの差し金か…偶然か。…金沢の親父さんが仲間に入ったってことはない。脅されてもいないはずや。」

「…怪しいと思わないのかね…」

結衣が盛大なため息をついた

「まあ良い話ネタに話つけたんやろ」

「まあ…預かるだけなら問題なくない？見つかなきゃいい話だし。会社側も損するわけだから対策は練ってるはずでしょ？」

「まあ、そのはずなんやが…あっちの策がわからんさかい、いくつかパターンあげとかなならん。最悪のケースだって考えられる。」

「最悪のケースね…」

「ああ、例をあげていくとやな、

- ・やり方を変えた

- ・自分達が危険になったから一時避難

…または

- ・なにもしていないと装うために社員に全部かぶせて逃げるため

…

まあほかにもあるんやろけど…大々的に出るのはこれらやろ」

「どれにしろ…嗅ぎ付けられたらヤバイのは由子のところだよね…」

「そうゆうこっちゃな」

「はあ…バンビ（一般人）はこれだから困る…」

「そやな…自分では被害を減らしてるつもりやろけどな…関係あら

へん奴卷込んで被害拡大させちよる」

「お仲間意識が強いことで」

「せや、お前はどないする？」

「ん？由子だけは守るよ。他は知らない。引退した身だし…あんたの仕事だしね？」

「そか。…金沢 由子に便乗してその家族も守ってくれたら俺…む
っちや楽なんやけどな…」

ダメかあ…？つと含みつつ遠回しに言ってみる

「あたし、体三個あるわけじゃないから無理。まあ…」

「うん？」

「なんとかしてみるよ」

「恩に着るわ」

ホッとした笑みを浮かべながら小林が胸をなで下ろした

「んじゃ貸しひとつね」

ニヤツと笑みを浮かべる結衣
小林の笑顔が一気に崩れ去った

「……へい」

+

「…はい。今のところは問題ありません」

「そうか」

「あの計画が問題なく動けば彼女を引き戻す種になります」

「ふむ…楽しみに待っているよ」

「はい。必ずや成功させてみせます」

ピッ

電話を終えたと同時に玄関の鍵を開ける音がする

ガチャ

「ただいまあゝ」

呑気な声が家の中に響き渡る

「あ、おかえりなさい緑香さん」

「おっゝ？流架…早いじゃん」

「そうですかね…？」

時計を見ると…六時

まあ、確かに早い方ではある

「情報屋の端くれとしてはまだまだだねゝ。ちゃんとなんでもいいから情報を集める。これは基礎だよゝ」

「…緑香さんはほんと仕事熱心なんですね」

「んゝ…そかな？」

ソファにドカッと座る緑香

「ビール持ってきてゝ」

「はい」

キッチンへ入り、缶ビールを手に戻る

「さんきゅ」

受け取ったビールを開けると、ぷしゅっという音になった

「それにしても、緑香さんもいつもより早いですね？」

「ん？ああ…ちよつとね…」

それ以上話そうとはしない

「流架、腹減った。なんか作れ」

「はい」

キッチンへと再び姿を消す流架

それを見届けたあと緑香は深いため息をついた

+

前日の午後、お昼過ぎ

「あれ、金沢さん？どうかしたんですか？」

今現在、潜入調査中の会社で親しくなった人がいる
主に自分の世話係りをしてくれていた人だ

その人が今、見慣れないトランクケースをもって身支度をしている。
それが金沢さんだ

「ん？今日は早番なんだよ」

「いや、それもありますけど…」

「ああ、呼び出しのことかい？なんか上の方からね、このトランク
ケースを預かって欲しいと言われてね」

そう言い、そのケースを見せる

「…へえ？なにが入ってるんですか？」

「いや、それが、中は見るなと注意を受けてね…私も知らないんだ
よこれが」

「え…それなのに受けたんですか？！」

なんて無防備なんだこの人は…

「いや、まあ大丈夫だろう。それじゃお先に失礼するよ」

あははと笑いオフィスを出る金沢。

その後ろ姿をただ…見ていることしか出来なかった

+

あれは…たぶん俺の探しているモノだ…

となると、俺は彼に手をかけねばならない…

再びため息をつく

すると夕飯が出来たのだろう流架がおかずをもって入って来る
エプロン付きでだ

「できましたよー今日はチャーハンです!」

そう言いテーブルに置いてゆく

行っただと思ったらまた顔だけだして

「緑香さんも手伝ってくださいね!」

そう言いまた消える

「この時だけ忘れてもいいよな…」

そう呟き、立ち上がってキッチンへ向かう

聞こえるのは楽しそうな笑い声

自分の慕っていた人を手になければならないかもしれない……そんな辛い想いはまだ忘れていよう

夜の闇のように……再びそれが訪れるまで

……願わくば……そうならない事を祈って……

第4夜 齒車（前書き）

この話は小林が結衣の家に行く前の話です

第4夜 齒車

”gleam”

そこは、情報の店

十

カランカランという音と共に入口を開けると青暗い店内。中は横長に広く周りには四角や丸のテーブルやイス、奥の正面には半円型のカウンター。中にはバーテンダーが2、3人入っている。

…まだ早い時間だから人は少なくグラスのあたる音が心地よく響いている

俺は目当てのバーテンがいない事を確認し、心の中で舌打ちしながら適当にカウンターに座った。

そろそろいい時間になり、大した収穫もないのもう行こうかとぼんやり考えていると、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた

「あれ？小林？」

その声が店内に響く

見るとキョトンとした顔で立ちほうけている男がひとり…名前は五十嵐 緑香。

黒い髪は少し高く後ろで一つに束ねていて、中性的な顔が目立つ。普段は見慣れないスーツを着ていて、どこことなく新米ホストのような感じだ。…まあ、手に持っているのはサラリーマンとかが持っているようなバックなのだが

「…五十嵐か」

聞こえないくらいの声で呟いてカウンターに向き直る

「無視か！！」

叫んだ五十嵐がズカズカと歩み寄ってきて隣りに座った

「なんで隣りに座るんだよ…」

嫌そうな顔をする小林

「べつつにー久し振りなんだからいいじゃん」

バーテンになにやら注文しながら答える

嫌そうに言われたのに動じていないようだ

「好きにしる」

正面に向き直りグラスに一口、くちをつける

「そーいや、最近調子どうよ」

五十嵐が顔を覗きこんできた

「…至つて健康やで」

無表情のまま言葉を返す

「そーじゃなくて、仕事の話…! job!…」

カウンターをバンバン叩きながらキーキー言っている

「…別に」

「あれー？今凄く大変な時じゃないのかなー？」

にまっとな顔を歪める五十嵐

小林は静かに相手を見据えた

「…なんの話や」

「しらはつくれても無一駄。俺の情報網甘く見ないでよね。知ってんだから」

「…なにを」

「狙われてるやろ？あのお嬢ちゃん」

獲物を見つけたように瞳の奥を輝かせる

「それがどうした。今に始まったことじゃない」

グラスに入った酒を一気に飲み干す

「そうなんだろうけど、これまでと規模が違うと思うよ？」

「……どういう意味や」

「今まではどつかのバカが自分の知名度上げたいがために狙ってた訳だけでも、今回は違う。」

トーンを抑えた声で話す

「へえ？」

「お嬢ちゃんの周りで被害に遭ってる子…いるんじゃない？」

「いや…今んところはおらんで。見当外れやな」

ふんつと鼻を鳴らす

「あれー？おつかしいなー…」

眉をへの字にして、頭を掻く五十嵐

…昨日の今日じゃまだ動かないか…

「お前の無駄話に付き合う気はない」

席を立ち、店を出るために出口へと向かう

「ちょっ…！！なにかあってからじゃ遅いんだぞ！！」

叫ぶ五十嵐に足を止める

「じゃあ、それについて確かな情報をお前は持ってるんか？」

「……持つてるさ。じゃなやかやアンタに話したりしない」

真剣な表情で小林を見据える

「ふん…聞こうじゃないか」

席に戻り、座り直す

「つまんねえ話だったら帰るからな」

バーテンが差し出したウォッカを手取る

「金沢 由子。聞き覚えがあるはずや、なんせアンタのクラスでお嬢ちゃんと付き合ってる数少ないお友達だからね」

「…そいつがどうした」

「ああ、俺がとある会社に潜入調査に入っただ。そこで俺の世話をしてくれた人が金沢 優すぐるさん。彼女の父親だな」

「……それがなんの関係があるんや」

「話はこつからや、その会社がヤクの密売疑惑でな、そこんとこ調べてて…」

「なんでお前の仕事の話を聞かなあかんねん」

ガタツと立ち上がろうとすると

「ちょまあっ！！（ちよつと待てい！！）」

思いつきり上着を捕まれた

「金沢家が殺されるかも知れないんだよ！！」

「…は？なんでそこに金沢家が関わってくるんや」

「人の話は最後まで聞け」

チツと舌打ちをし、掴んでいる手を払いのけ再び座り直す小林

「昨日の事だ。金沢さんが呼び出されたんだよ。そこまでは別にいいんだ…けど、戻ってきたら行くときは持ってなかったデカイトランクケース持っててなあ…」

「預けてたとかじゃないん？」

「たぶんそれはないな。聞いたら会社から預かったって言ってたし…それに、俺が鼻利くこと知ってんだろ？あれは間違いなくシャブだ…」

「んじゃまあ…考えられるのは大きく考えて3つやな…」

小林はタバコを取り出し火をつけた

「バレそうになってヤバいからとりあえず隠すため、今まで関係者内で回していたが、やり方を変えた、関係のない奴を巻込んで全ての責任を負わせる…はたまたそのための保険か…いずれにせよ、バンビには荷が重いな」

ふう…と煙をはく

「ああ…考えても嫌な結果しか出てこない。」

五十嵐をみるとどこことなく暗い表情をしている

「で？お前は どうしたい？俺に話すんだからな、余計な事考えてん

だろ」

「……もし、殺されるようなら……そうゆう計画なら……守りたい……かな」

「やつぱし……お人好しやなあ……たかが面倒見てくれたくらいで」

「小林はあの人のお人好しさを知らないからんなこと言えんだよ」

「知りたいとも思わへんけどな」

ははつと五十嵐は苦笑する

「アンタのそうゆうとこ変わってないなあ……必要なもの以外無関心……っての?」

「……せやな。いらんもんあつたって邪魔なだけや」

「そう言つて消された奴等が何人いることやら」

「ふん。……で、お前は俺にどうして欲しい?俺ひとりじゃ出来る事は限られてるで」

「ん?ああ……出来ることなら金沢家の人達を守つて欲しいと思つてんだけど……」

「おいおい、俺が3、4人いるならともかくひとりなんやから無理があんで」

その言葉に五十嵐はキョトンとした顔になった

「え？アンタのことだから顔広いし協力者とかいると思ったんだけど？じゃなきゃ…あの死神を守りきれるわけ…」

「五十嵐」

「えっ…あ…」

慌てて口をふさぐ。

今、裏の世界では死神は行方知れずとなっていて、それに関わっているものはその名前を呼ぶこと、その情報の流出を禁じている

死神が開放を望んだ。…それを快く思わない者から遠ざけるために

五十嵐もまた、それに関わった人物のひとりである

「…あいつは余程のことがない限り自分の身は自分で守れる。俺がしてるのあいつに関しての情報を乱すくらいや」

「ふうん…流石だねえ…お嬢ちゃんは…」

…死神と呼ばれていただけはあるな…

「んなことはどうでもいいんだよ。金沢の件や」

「ああ！！そうだよ！！忘れんなよ！！」

はっ！！とした顔をする五十嵐

「忘れてたのはお前やる」

呆れてため息をつく小林

「……協力してくれんのか？」

「まあ、金沢 由子が関わってるなら仕方ない」

「まじか！！恩に着るわ！！」

感きわまりないとゆう顔を小林に向ける

まっ…眩しい…

きつと犬のしっぽがついていたなら千切れんばかりに振っているだ
ろう

そんな光景が頭の中に浮かび、ふ、と微かに笑う

持っていたグラスの中身を飲み干す

「ギヤラは今日の酒代でええで。じゃあな」

そう言葉を置いて立ち上がり去って行く小林

「なんかあつたら連絡するわ!!」

扉を開けている小林に投げ掛けると片手を上げひらつと揺らし、夜風と共に消えて行つた

十

外へ出ると紫の空が黒に染まっていた

あの情報は本当だったのか…

歩きながら空を見上げてなにか考えているようだ

「パズルピースはもう少しで繋がるな」

ふっ…と微かに笑いを浮かべた

全てが繋がったとき…

お前は…どうなってしまっただろう…

第4夜 歯車（後書き）

更新が遅くなりつつあります…ごめんなさいm（―――）m

そして、この話は不定期更新になりそうです…ご迷惑おかけしますorz

しかし、必ず更新はしていきますので、どうかよろしく願いします（・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8248d/>

裏世界の死神少女

2010年10月10日03時52分発行